

# 朝鮮通信使の文化交流の受け手

## —知識人と民衆

仲尾 宏（京都造形芸術大学）

1. 室町時代、3回の朝鮮通信使が京都へ到着して足利將軍家と儀礼を交わした。その時の一行の編成は約30名前と記録されている。その時にも樂士などを帯同してきていたことがわかっている。

秀吉時代には2度の通信使が派遣されてきた。1590年の時の規模は不明であるが、樂士を帯同していた記録がある。儀礼と朝鮮国の文化的威容を示す意図があったかも知れず、2度目の1596年は309名の編成で正使は文官、副使は武官であった。この秀吉は一行の大坂、京都入りを許さず一行は堺に滞留するのみであった。

2. 江戸時代の最初の回答兼刷還使（1607年）は正副使とも文官とされ、あらたに従事官が加わる三使体制となった。一行は504名、日本側と主として応接する役目も持った製述官が加えられ堂上訳官、写字官、画員、医員が正式に員役とされた。この派遣体制は1768年の第11次までは踏襲された。こうして江戸時代には通信使の副次的使命として日本への文化伝達が意図されていたことがわかる。

3. 日本の各界の人士との交流は3つのグループにわけで考えることができる。

その第一は儒学者たちとの筆談・詩文の応酬である。これには製述官（時には読祝官・学官と呼称された）が主としてあたり、書記が従った。従って日本各地に残されている遺墨もこれらの人物が認めたものが多い。日本側では幕閣の林大学頭をはじめ新井白石を筆頭とするお抱え儒者、各地・各藩の藩儒、さらに後半になると在野の学者も加わった。とりわけ在野の学者たちが加わったことにより、江戸中期から後期にかけての古学など日本の儒学の新しい萌芽が朝鮮に伝わった。写字官の他に各地で医員が医事問答の相手となり、最新の朝鮮医学が日本の医学界に寄与した。画員はおおくの水墨画などを残したが、日本側では池大雅、大岡春卜などが積極的に参加した。また以酊庵輪番の対州修文職が往復に同行し、その途次に交流したことにも触れておく必要がある。

4. 江戸日本の識字人口は18世紀に入ると著しく増加した。そのためその子弟が交流の場に行ったり、子の字や号を授かることを望むものもあらわれた。上田秋成がのべた「唐人をみたことを歳忘れ」との言葉どおり、一生一代のページェントとして、民衆も見物はもとより、一行の書を1枚でも手に入れようとしたことも使行録などに記録されている。

そのような民衆の物見高さは多くの屏風絵にも描かれており、また18世紀後半には通信使の来日が報ぜられると、絵入りで木版刷りの書物があまた出版されるよ

うになった。

5. またいくつかの地域で「唐人踊り」「唐子踊り」が今日も伝承されて各地の祭礼の中にデフォルメされて残されている。江戸時代の「異国ぶり」を今日に残すものである。また寺社の絵馬、朝鮮人や通信使行列をあしらった土人形をはじめとするさまざまな民具、人形などもなお日本各地で見ることができる。これらも有形・無形の文化財として貴重な遺産であろう。

### まとめ

- ・ 朝鮮通信使の来日は近世国家の外交行事であるが、これを文化伝播の側面からみると、その知的刺激は近代日本が欧米文明から受けた刺激に優るとも劣らない強烈な刺激であった。それは儒学、医学、本草学、暦学、詩文など多様な分野に広がっていた。その結果として日本人の教養の蓄積は一段と高まった。
- ・ 絵画、書、詩文など芸術的分野においても日本と朝鮮との共通性と異なりをまなびあうことになった。それは東アジアの漢字文化圏、そして古代以来の共通した文化的土壌の上にある、という認識があったからであろう。
- ・ また当時の日本文化の諸相が朝鮮にもちかえられた。そして日本文化・文明の急速な発展・発達を朝鮮の知識人も知るようになった。その一部は中国にも燕行使によって伝播している。
- ・ 民衆の物見高さは異国情緒を実見したことにより、日本が東アジアから隔絶された存在ではないこと、おおくの共通性と同質性を共にする朝鮮文化に触れたことによって、その視野を広めることに役立つたといえよう。

(報告では以上の論点の裏付けのために文献資料、映像資料を用いて説明した。)